

硫黄島の火山活動解説資料（令和2年3月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

GNSS連続観測によると、隆起を示す地殻変動がみられています。また、硫黄島の島内は全体的に地温が高く、多くの噴気地帯や噴気孔があり、過去には各所で小規模な噴火が発生しています。火山活動はやや活発な状態で推移しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生すると予想されますので、従来から小規模な噴火がみられていた領域では噴火に警戒してください。平成19年12月1日に火口周辺警報（火口周辺危険）を発表しました。また、平成24年4月27日以降の火山活動に伴い、平成24年4月29日に火山現象に関する海上警報を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図2、図7～9）

阿蘇台東監視カメラ（阿蘇台陥没孔の東北東約900m）による観測では、島西部の阿蘇台陥没孔からの噴気の高さは100m以下で経過し、島北西部の井戸ヶ浜からは噴気は観測されておらず、特段の変化はありません。

- 【現地調査結果（3月12日～16日）】（図7～9）

海上自衛隊の協力により、3月12日から16日にかけて現地調査を実施しました。

『千鳥浜』

噴気の状態や地熱の状況に、特段の変化は認められませんでした。ガス検知器で硫化水素が検出されました。

『阿蘇台陥没孔』

噴気の状態や地熱の状況に、特段の変化は認められませんでした。ガス検知器で硫化水素が検出されました。

『翁浜』

地熱域は認められませんでした。

- ・地震や微動の発生状況（図3、図4）

火山性地震は、概ねやや多い状態で経過しました。8日に110回と増加しましたが、その他の日は、100回以下で経過しました。

今期間、火山性微動を1回観測しました。火山性微動が確認された時間帯に、その他の観測データに変化は認められませんでした。

- ・地殻変動の状況（図5、図6）

GNSS連続観測では、島全体の隆起が継続し、最近数か月は隆起速度が大きくなっている傾向がみられます。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

次回の火山活動解説資料（令和2年4月分）は令和2年5月13日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『2万5千分1地形図』『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています（承認番号：平29情使、第798号）。

これまでの火山活動（図1）

硫黄島ではこれまでも1981年から1984年（防災科学技術研究所等の水準測量と三角測量による）や2001年から2002年に最大1mを超える隆起など顕著な地殻変動が観測されており、隆起が見られていた期間中の1982年と2001年には小規模な噴火が発生しています。

一方、噴火前に必ずしも地震活動が活発化するとは限らず、地震観測が開始された1976年以降で見ても、1982年11月の阿蘇台陥没孔や2001年9月の翁浜沖で発生した噴火、2012年4月29日から30日、及び2018年9月の噴火と推定される事象以外は、ほとんどの噴火で事前に地震活動の活発化が認められませんでした。2015年8月7日に北の鼻の海岸付近で発生したごく小規模な噴火も、事前に活動の変化は特段認められませんでした。

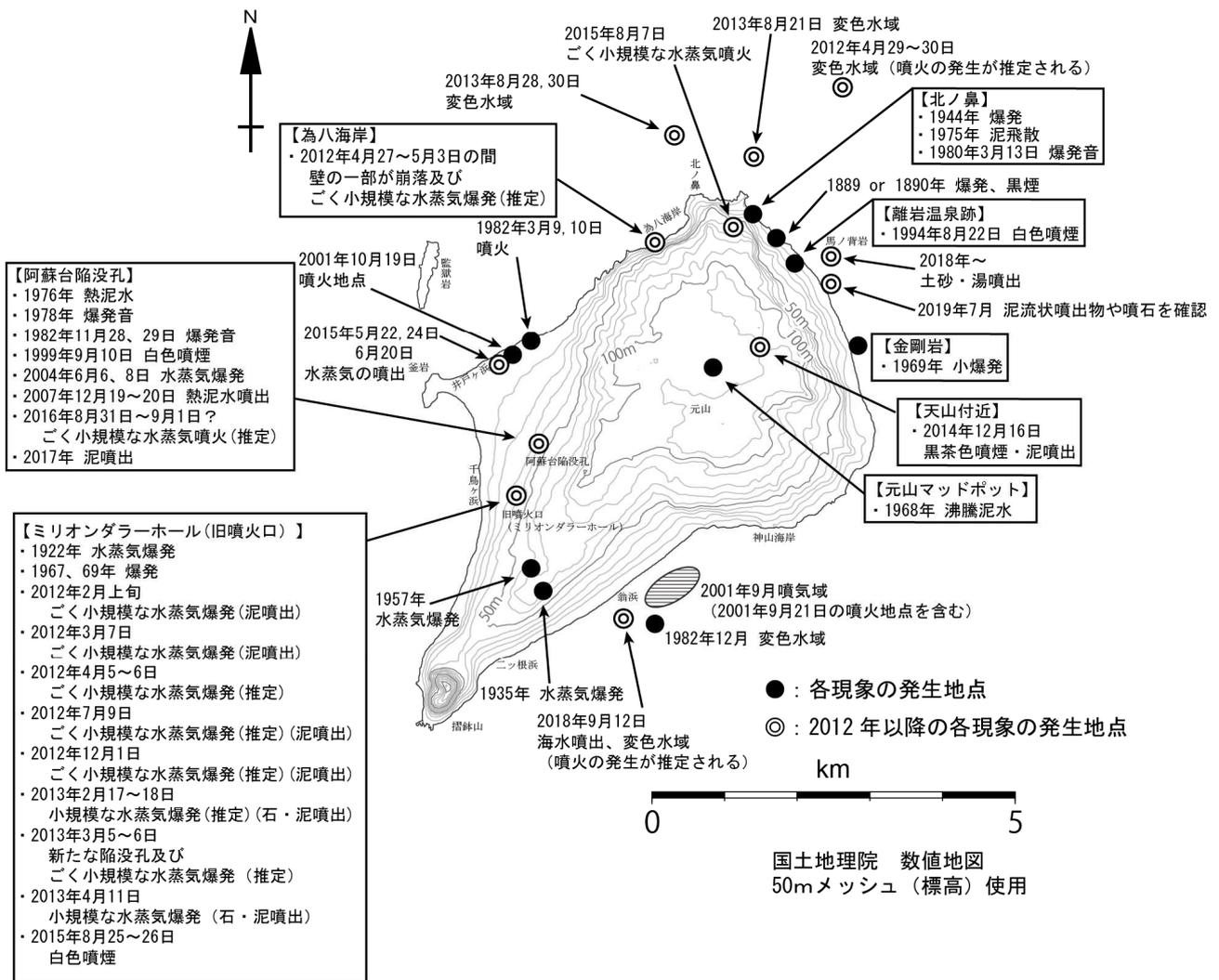


図1 硫黄島 過去に噴火等が確認された地点及びその後の状況

「鶴川元雄・藤田英輔・小林哲夫，2002，硫黄島の最近の火山活動と2001年噴火，月刊地球，号外39号，157-164．」を基に作成し、2004年以降の事象について追記



硫黄島 遠望観測対象地点
地理院地図を使用



阿蘇台陥没孔の噴気の状況（3月24日撮影） 井戸ヶ浜の状況（3月16日撮影）
図2 硫黄島 海岸付近の噴気の状況（阿蘇台東監視カメラによる）

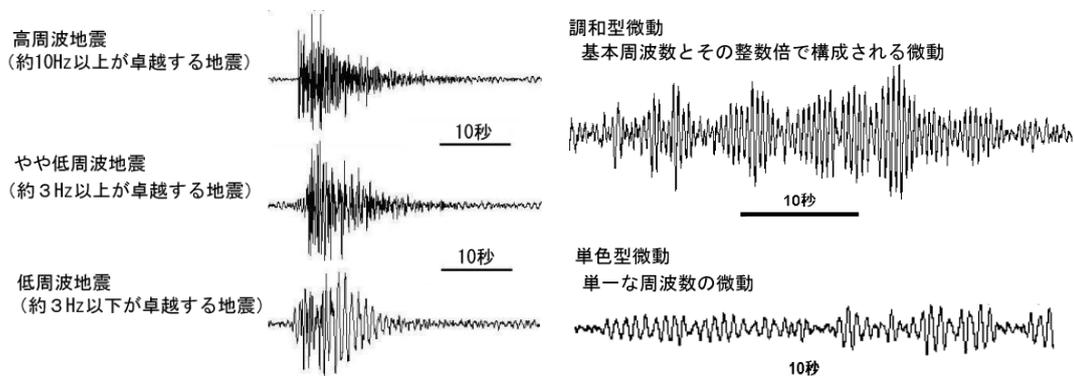


図3 硫黄島 硫黄島で見られる主な火山性地震、微動（調和型、単色型）の特徴と波形例

：噴火、：噴火等が推定される事象

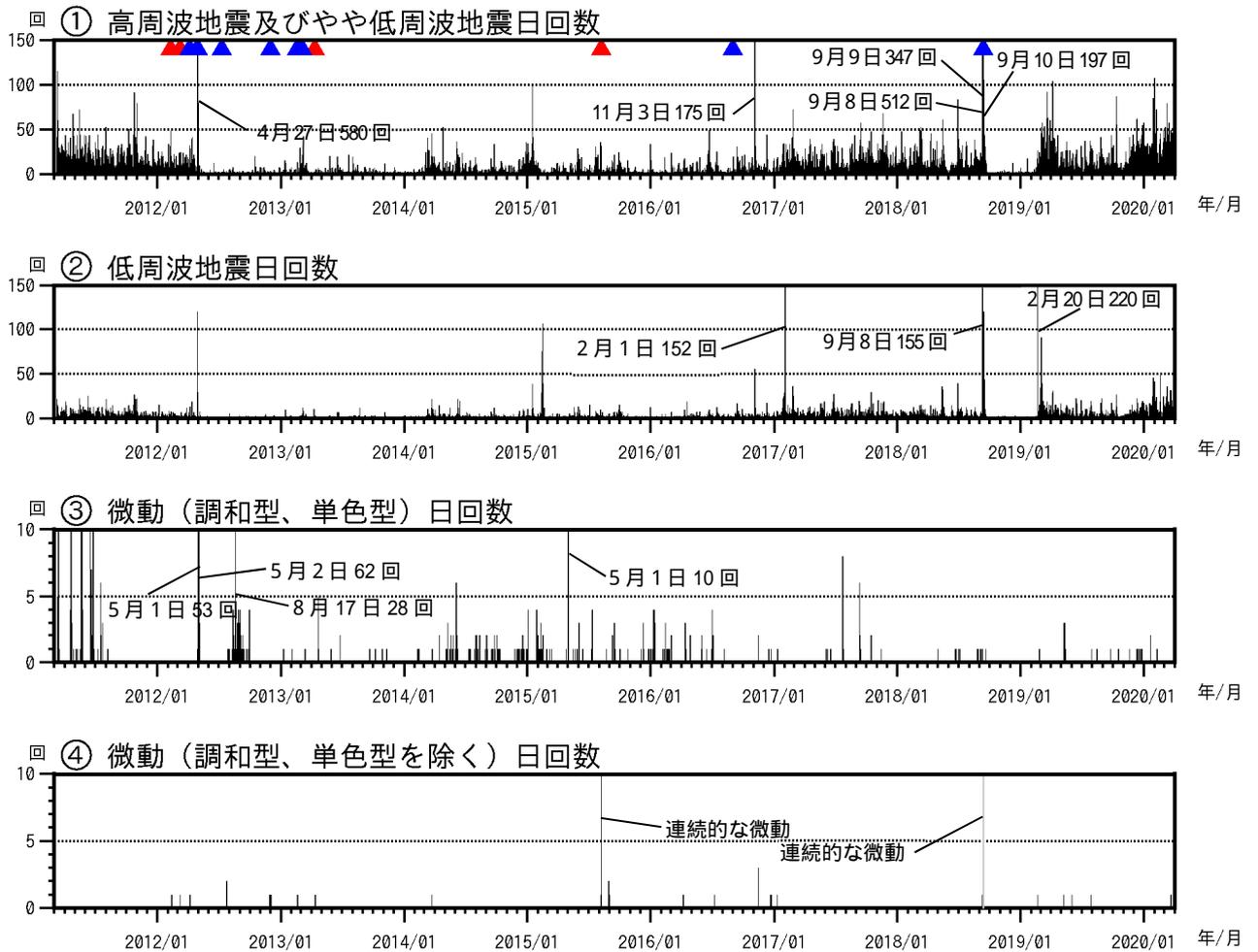


図4 硫黄島 火山活動経過図（2011年3月8日～2020年3月31日）

【計数基準】

2011年3月8日～12月31日：千鳥 30 $\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間 2.0 秒以内、あるいは
天山（防） 20 $\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間 2.0 秒以内
2012年1月1日～：千鳥あるいは天山（防）で 30 $\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間 2.0 秒以内
千鳥（地震計・空振計）は2018年9月22日から2019年1月28日まで障害のため欠測です。
また、2020年2月11日以降、障害のため各観測点において一部欠測の時間帯があります。
（防）：防災科学技術研究所

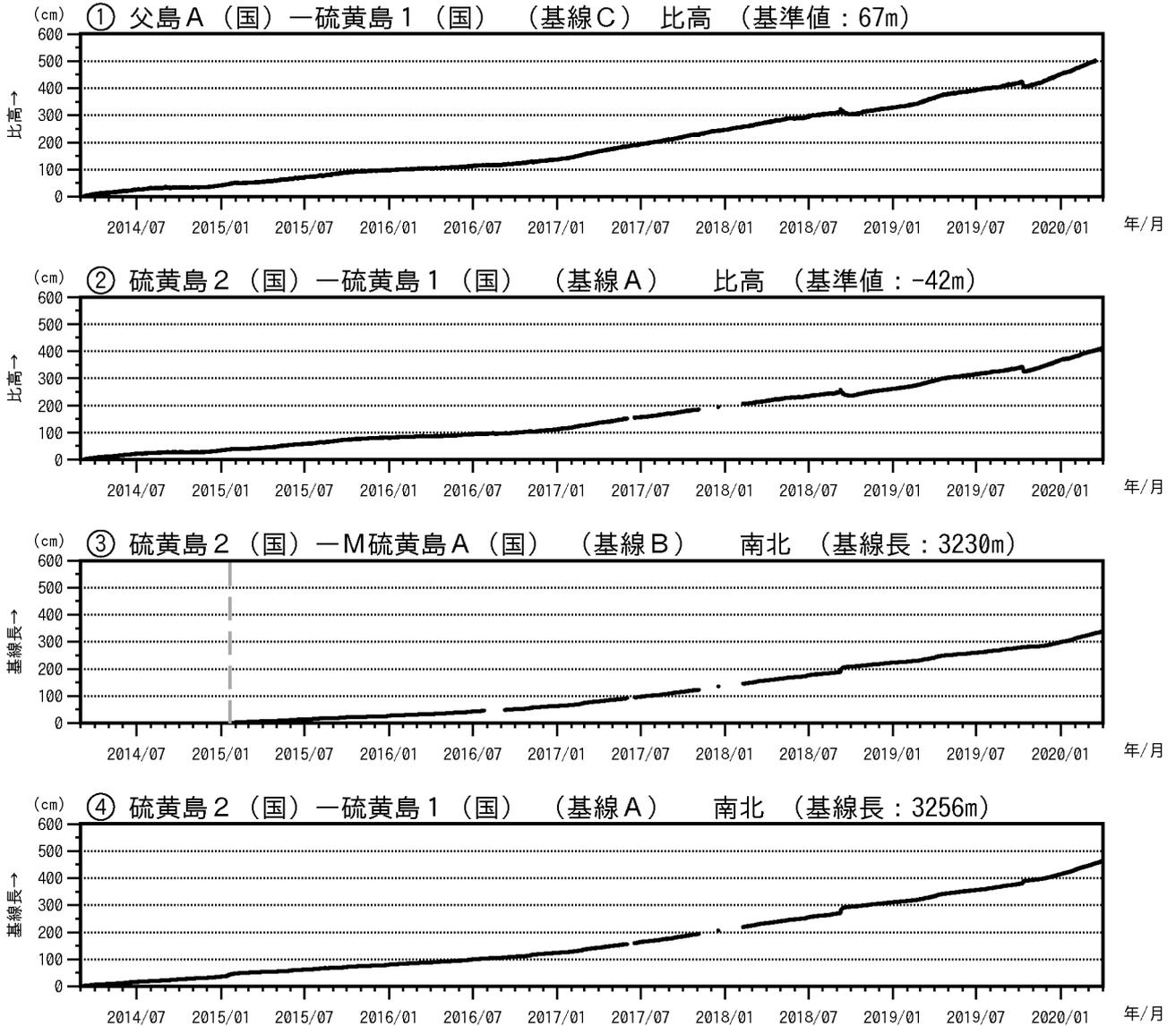


図5 硫黄島 GNSS 連続観測結果 (2014年3月1日~2020年3月31日)

(国): 国土地理院

グラフの空白部分は欠測

父島 A に対する硫黄島 1 (島北部の元山地域) の比高の変化 (図6のGNSS基線 C に対応)

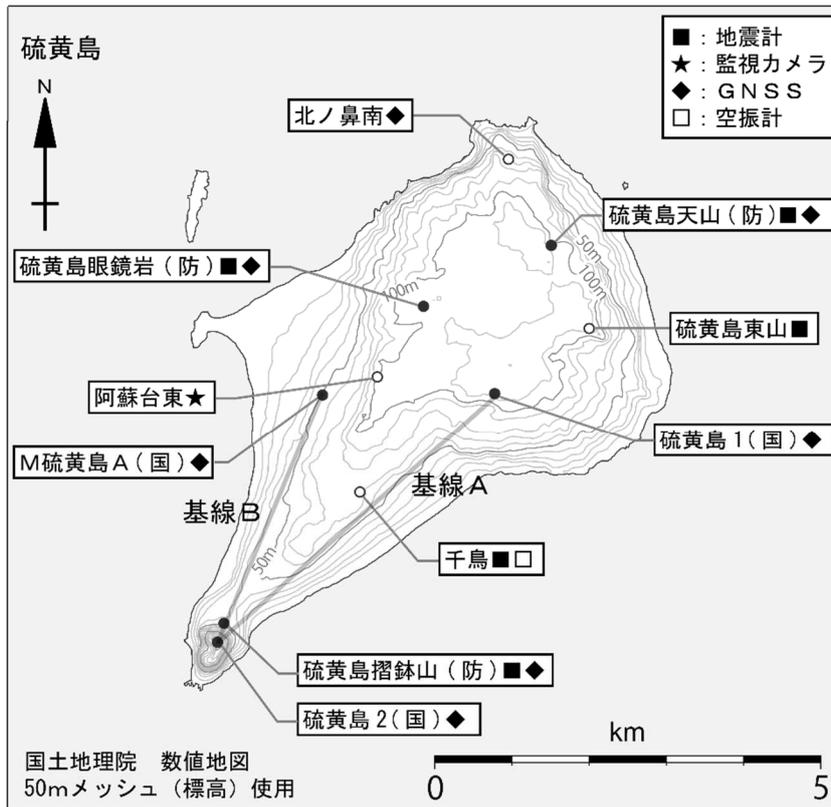
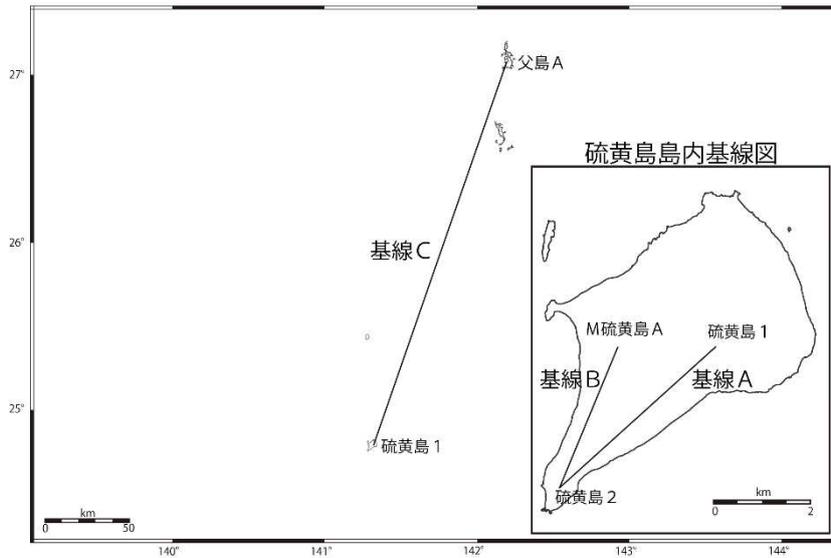
硫黄島 2 に対する硫黄島 1 の比高の変化 (図6のGNSS基線 A に対応)

硫黄島 2 に対する M硫黄島 A の南北の変化 (図6のGNSS基線 B に対応)

硫黄島 2 に対する硫黄島 1 の南北の変化 (図6のGNSS基線 A に対応)

- ・GNSS 連続観測によると、島全体の隆起が継続し、最近数か月は隆起速度が大きくなっている傾向がみられます。

硫黄島周辺 G N S S連続観測基線図



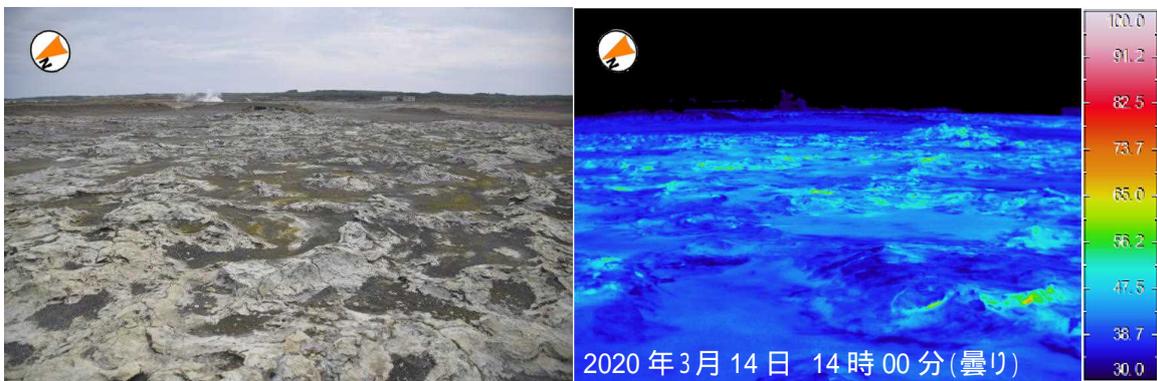
小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

図6 硫黄島 観測点配置図

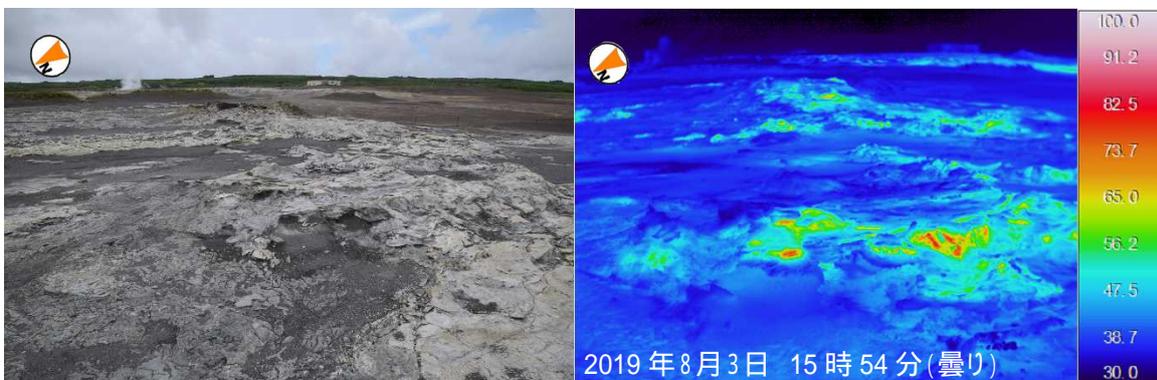
小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所。
 GNSS基線は図5の基線に対応しています。



千鳥ヶ浜の地熱地帯の場所と撮影方向



2020年3月14日



2019年8月3日

図7 硫黄島 千鳥ヶ浜付近の状況

- ・噴気の状態や地熱の状況に、特段の変化は認められませんでした。
- ・地熱域周辺ではこれまでの調査時にもガス検知器で硫化水素が検出されています。今回の調査においても10ppm程度の硫化水素が検出されました。



阿蘇台陥没孔の地熱地帯の場所と撮影方向



2020年3月14日



2019年7月31日

図8 硫黄島 阿蘇台陥没孔の状況

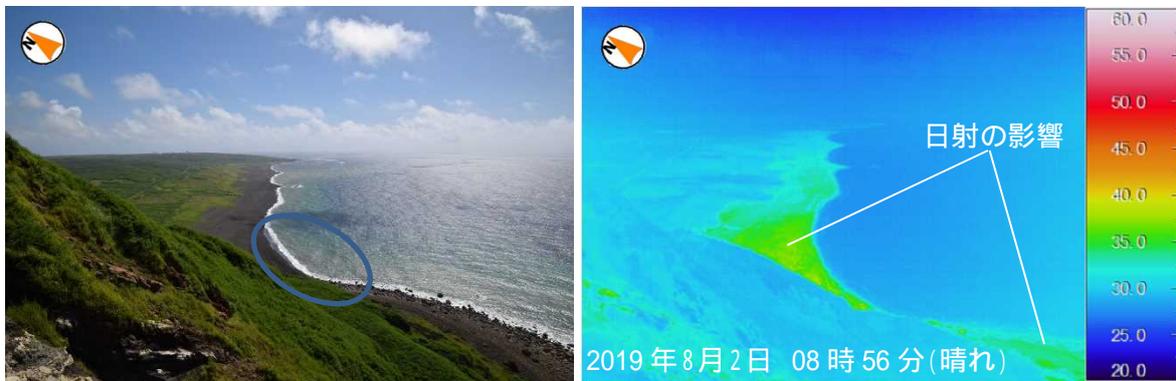
- ・噴気の状態や地熱の状況に、特段の変化は認められませんでした。
- ・陥没孔周辺では、これまでの調査時にもガス検知器で硫化水素が検出されています。今回の調査においても数 ppm 程度の硫化水素が検出されました。



翁浜一体の位置関係と撮影方向



2020年3月15日



2019年8月2日

図9 硫黄島 翁浜の状況

・前回（2019年8月）の観測時同様に地熱域は見られませんでした。また、2019年8月と比較して砂浜部分に拡大が見られ、海岸線地形に変化が認められました（図中青丸部分）。